〈平成十六年度卒業論文から〉

## 幻の紙「羅文紙」の製作技法（要旨）

木村　まど可

平安時代には、ひらがなの成立とともに、和歌を詠むことが盛んになり、様々な料紙が作られた。抄紙段階で加工したものには、打雲、飛雲、そして羅文紙がある。羅文紙は他の装飾料紙と比べると華やかではないが、繊細さ、高貴さは他のものに劣らない。また製作技法が謎という幻の紙である。

羅文紙とは、地紙の上の着色繊維がよれて漉き合わされ羅の繊維のようにも、また微風に崩れる波紋のようにもみえる料紙である。技法としてはよほど紙を薄く漉く技術、つまりネリを使った流し漉きの頂点のような技術が応用されたものと思われる。羅文の繊維が重なって凹凸があるようでありながら、その筆致にすこしのかすれもみられず表面が平滑とみられるのは、地紙の上に漉き上げた羅文の湿紙を簀ごと伏せて移し、滑らかな簀表側の紙肌が表面になっているからといわれている。

羅文紙が使われている古筆としては、伝藤原佐理筆「古今集筋切」・伝源俊頼筆「高光集切」「大字切」・「西本願寺本三十六人家集」の一部などがあり、どれも名筆であるが現存するものは少ない。平安時代の一時のみにしか存在せず、その後製法も絶えてしまったため、現在までに何人もの紙漉き職人や料紙作家が復元に挑戦したが、再現できずにいる。

私はこの幻の技法を明らかにする事を目的とし、文献調査と試作実験を行なった。文献調査の結果、羅文紙の条件として以下のことがあげられる。1、羅の文様のある紙　2、藍や紫に着色した繊維を使用　3、あらかじめ漉いた紙に着色繊維を流す　4、繊維を流し何らかの細工をする　5、平安時代の一時にみられたのみ　6、現在は復元が困難・不可能という6点である。そして、この文献調査や羅文紙の試作に取り組んだ人々の言葉をもとに実験を行った。まず、和紙の代表的原料である楮紙とガンピ紙を用意する。それぞれを一ミリ角、三ミリ角、五ミリ角、一センチ角にカッターで切断した。それをすり鉢で繊維状に戻し、少量のネリ・水を混ぜ、サクションテーブルにセットした湿紙の上に流し込む。水分が引いたら紗をかけ、羅文生成の細工をした。いくつかの実験を通して失敗ばかりではあったが、自分なりの羅文紙を作ることができたと思う。私の卒業論文の目的は「羅文紙の製作技法を少しでも明らかにする」ことなので、目的は達成できた気がする。

（小津産業株式会社　小津和紙博物館）